

『フユメモリー ～ きみと同棲と夢のつづき～』

特典シナリオ台本

【登場人物】

河瀬 柚乃（かわせ ゆずの）（23）

『私』の恋人。現在、付き合って3年目。

現在、舞台を中心に俳優の卵として活動中。

同棲生活では料理担当をしている。

サバサバしているように見えるが面倒見はよく、周囲から好かれるタイプ。しかし、あなただけには、人には見せない、甘えん坊なところも…？

《年齢》23歳 《身長》166センチ

《血液型》A型 《バスト》C

私（23）

大学卒業後、社会人一年目。

ナツトリップの後、秋に就職先が決まる。

お淑やかで大人しい性格だが、

柚乃に対しては、少し積極的になってきて…？

《年齢》23歳 《身長》162センチ

【あらすじ】

『私』と『柚乃』は大学時代の同級生。

演劇サークルで出会い、付き合うことになった二人は、卒業した現在、一つ屋根の下で一緒に暮らしている。

季節は冬。

朝、目が覚めてから、夜、眠りにつくまで。

恋人と過ごす、同棲生活の一コマを切り取った音声作品。

恋人『柚乃』と過ごす愛しい日常が、

どうかあなたの記憶に残りますように。

【INTRODUCTION：シトラス・デイズ きみと結ばれる夢】

○私の夢

同棲に至るまでの日々。

二人の思い出の断片が流れていく。

○寝室・ベッドの上（朝）

柚乃と私は一緒にベッドで寝ている。

朝6時45分。柚乃が設定したアラームが鳴る。

その音で二人、目を覚まし始める。

「（アラームの音に気付いて）……ん。

（半分寝ている状態からスマホを探す）んんー……」

スマホの位置を探す柚乃。

スマホ置き場があるのですぐ見つかるが、

眠気でなかなか身体が思うように動かない。

スマホを掴んで、起き上がる柚乃。

「（上体を起こして、小さく呟く）さむっ」

スマホをタップしてアラームのスヌーズを切る。

柚乃は、横で寝ている私を手で触って軽く揺する。

何回か揺するが起きない。

「……ほら、起きて。

朝だよ、おーきーて」

寝返りを打つ私。

「今日出勤日でしょ？」

布団をぎゅっと抱きしめて抵抗する私。

「もう、ほら、今日行けば、あとテレワークだって」

さらに抵抗を強める私。布団を巻き込む。

「あ、ちょっと！寒いから！やめて！」

「もう。（体を伸ばして）ん~~~~~！
（自分に言い聞かせるように）よし、起きよー」

柚乃、ベッドから這い出る。

リモコンを手にして暖房つける。

「はー、さむさむっ。
なんか着よう。」

上……（探して）これか」

昨晚脱ぎ散らかした服を拾って着ていく。

「（着替えながら）ねえー。そっちに、私のパジャマの下ない？
布団の中とか」

私、布団の中にズボンを見つけてとりだす。

「あ、あった？
ちようだい」

私、上体を起こして柚乃にパジャマのズボンを渡す。

「自分のパジャマは？
あー、ベッドの下の方？」

「みつけた。
しょうがない。
拾ってさしあげましょう」

柚乃、ベッドに上り、私のパジャマを回収する。

「(回収して) ……よし
じゃあ、起きるよー。
ほら、手。手、のばす」

「そうそう、えらいねー。
……はい、捕まえた」

柚乃、私の手を引っ張り上げる。

「はーい。おはよう。朝だよ。
(あなたをみて) ふふっ、目、全然空いてない。
また糸目になってる」

「(笑いながら) というか寝癖！
跳ね方すご！」

「今？ えー、多分まだ7時前。
あ、ダメだよ。二度寝。
会社行かないと」

私、柚乃の方あたりに手を回す。

「……なんですか、もう。
手、回して。」

「……なんか今日、甘えん坊」

「(呟き) あー……。かわいい。かわいすぎ」

「……目あけて。準備しよ？
ほら、パジャマ、置いとくよ」

私、ベッドから出て自分のパジャマに袖を通す。

○洗面所

着替えた私は洗面所へ。

柚乃は歯磨きを終えている。

「（顔を軽く洗って）……ふう。

……お、起きてきた」

「使っているよ。

準備するでしょ？ 髪とか」

「大丈夫。私、今日何もないから、後でゆっくりやる」

「え、着る服？

えー、私が考えるの？」

「なに、今日、社外の人と会う感じ？

ああ、いつもの人？」

「じゃあ可愛い系かな…。

あれは？

上、白のケーブルニット。

ウケ良さそうだし」

「下……。

あー、ズボンがいい？

私の履く？ 茶色というかモカっぽいあれとか」

「おっけ。出しとく」

私、ドライヤーで髪を乾かす。

○ダイニングキッチン（テーブル）

私が髪の毛の寝癖を直したりしている間に
柚乃が朝食の用意をしている。

「（食材を探しながら呟き）えっと……どこに入れたっけ……。あ、そこか」

ドライヤーが終わって、ダイニングキッチンに出てくる私。

「あ、着替え、そこ、ソファのところにある。……うん、どういたしまして」

私、服を着替える。

メイクポーチから化粧品を出す。

メイク下地を縫って、ファンデをつけていく。

メイク中に、柚乃近づいてきて。

「おーい、ご飯、できたよー。

あ、まだメイク中？

…大丈夫、薄くても元がいいから」

「髪結んでるの、久しぶりにみた。
変じゃないよ、かわいい」

「（確認するように）んー……うん、大丈夫そう」

「え？ や、ちょっと気になって。

ほら、昨日のさ、結構、激しかったから。

……キスマーク、残ってたらやばいなって」

喋りながら席に座る。

「なんか、もうねー……。加減忘れちゃって。
特に先月なんてほぼ出社しなかったし」

私が席に着くと、柚乃、マグコップにコーヒーを注いでいく。

「他人のせいにしてない。
……違う。違うって。」

だって、求めるじゃん。
いや、それは私もか……」

私、柚乃のマグコップにコーヒーを注ぐ。

「あ、ありがとう」

「では、いただきますっ」

以降、朝食中の会話。

「大丈夫そう？ ん、よかった」

「なんか、今日、雨降るっぽいね。
……そうそう。いつからだっけ……」

スマホを見て天気を確認する。

「（スマホ見ながら）だいたい、あー、でも、20時くらいから。
傘は、持ってたなくていいかも。
帰る時間によるけど」

「え？ 結構、早いね。終わるの
……うん。出社する時、大体会議詰まってるイメージ」

「じゃあ、今日は夜、一緒に食べれるね」

「ん、私はー、
昼過ぎに事務所に来てくれて言われてて。
……うん、マネージャーさんと打ち合わせ」

「それ終わったら、帰って台本覚えるかなーって感じ。
あ、じゃあ帰りに買い出ししちゃうかな。
何か足りないものとかある？」

「へえ、そんなの出たんだ？
わかった。あとで画像送っておいて。
買っとく」

「ごちさまでした。
そろそろ出る？
時間はー…余裕じゃない？」

○玄関

私、玄関で靴を履く。

「あ、そうだ。ちょっと待った」

柚乃、ゴミ袋を取りに戻って

「今日、燃えるゴミの日だから……はい、これ」

柚乃、私にゴミ袋を渡す。

「下降りする時さ、持っていていてくれる。
…うん、ありがとう」

私、カバンを持つ。

「外冷えるから、気をつけて。
(キスをして) ……ちゅっ。
ふふっ、いってらっしゃい」

私、扉をあけて外に出る。

【EP02：ティスティ・アワー きみを迎える夜】

○玄関

私は会社から帰宅してくる。

柚乃がお迎えをしてくれる。

「おかえりー！

寒かったでしょ」

私はトイレットペーパーを柚乃に渡す。

「あ、トイレットペーパー。

買ってきてくれてありがとう。

切れてるのすっかり忘れてて…うん」

私、靴を脱いであがる。（柚乃、トイレットペーパーおろす）

「連絡見てくれて助かったー。

いやー、なんか忘れちゃったんだよね」

柚乃、私を抱きしめる。

「（抱き締めて耳元で） ……ふふふっ。おかえり。

寒かっただろうし、抱き締めあげようかなって。

……うん、ふふふっ、そうだね。

……ちよっと、寂しかったかも」

「……におい？ お腹、減った？

さあ、今日はなんでしょー？

……ふふっ、あたり。好きでしょ？」

「……うん、ご飯にしょ」

○洗面所

私、洗面所で手を洗う。

柚乃は台所で、ご飯を盛り始めている。

「（私が何か言って）え？ なにー？ 何か言った？」

私、手を洗い終えて、ダイニングキッチンへ。

○ダイニングキッチン（台所）

「なに？ ああ、ご飯の手伝い？

もうほとんどできてるよ。

あとは盛るだけ」

「（笑って） もー、褒めすぎ。

今日は時間あっただけ」

「……そうやって口に出して貰えるのは嬉しい。

あ、じゃあ、運ぶの手伝ってくれる？」

○ダイニングキッチン（テーブル）

食事を運び終えて、椅子に座る二人。

以降、食事中の会話。

「いただきます。」

「……ふふっ、あったまる？」

「（一口食べて） うん、美味しい。
丁度いいね」

「……ええ？ そう？」

料理の腕上がったかなあ。

多分、好みがわかってきんだと思う」

「んー、なんだろ。」

やっぱり食の好みって出るよね。

……うん、一緒に住んで思う」

「ほんとに、そう。」

当たり前だけど違う人間なんだなって」

「だから、いいよね。」

毎日発見があって、毎日新しい」

「え、今日の発見？」

んー、そうだなあ……。

今のところ、溢（こぼ）してない」

「気をつけてるんだ？」

（にやにやして）へえー」

「だってさ、結構激しくこぼすんだもん。」

ほら、あの……そうだよ、ミートソーススパゲッティ」

「（思い出して笑いながら）だってすごかったよ、あれ。」

しかも、ひっくり返して、宙浮いてた。

いや、ほんとほんと、誇張じゃないって」

「服汚しすぎて、部屋に着替えにいった、あの後。」

あれ、出会ってすぐくらいだよな？」

「え？ 私？」

そんな失敗したこと……？

私、なんかやったっけ……？（とぼけて）」

「ああ、考え事しているとやらかしがちかも。
……自覚はある、忘れ物とか」

「……え？ 今日、事務所で？
何かねえ……。

まあ、まあまあまあ……。
何かは、あったよね」

「……あー。……あのさ、
この後、一杯、付き合わない？」

「……よしっ。じゃあ、とりあえず、ごちそうさまでした！
からの……！ お酒、取ってくる！」

椅子から立ち上がって、冷蔵庫の前へ。
冷蔵庫を開けて中身をチェックする柚乃。

「今日は飲むしかないと思ってさ、
買ってきたんだよね。」

何がいいー？ サワー系？

（選んでいる）……私は、ハイボールにしよう」と

冷蔵庫を閉めて戻る。

「（あなたに缶を渡して）はいっ！」

二人、缶の蓋を開けて

「かんぱーい！」

お酒を飲む二人。

「（飲んで）ぷはああ〜。」

はあー……。もうね、色々あったの。

……。うん。そう。

ねえ、ちよっと聞いて？」

柚乃、事務所であつたことを私に話していく。

【EP03：カーム・タイム ほろ酔いの休息】

エピソード2の続き。

二人はお酒を2〜3杯飲んだ後の状態である。

二人はソファアに座っている想定。

○リビング

「（息を吐いて）ふうー。

ペース、早かったかなあ」

「：少し。回ってる気がする。

ちよっと、酔い覚ましにベランダ出る。
一緒にくる？」

「はあゝい。

（ソファアから立ち上がって）よいしょっと……。
（少しふらついて）おっとっとと。
ふふふっ、ごめん、ちよっとふらついた」

二人、ベランダに向かって移動する。

「あー、思ったより、回ってるかも」

私、上着を手にとって柚乃に渡す。

「上着、さんきゅ」

私、柚乃に上着を渡す。

二人、上着を羽織る。

○ベランダ（夜）

「……流石に外は冷えるねー。
足下気をつけて」

柚乃、スリッパを出してあげる。
私、それを履く。

「(寒さで震えがなら) ふうー。
あー、でも、夜風気持ちいいかも。
……酔い覚めそう」

「だいぶ飲んだねー。そして、喋った。
聞いてくれてありがとう」

「うん。わかってる。
マネージャーさんが言うこと、正しいんだけどさ。
言い方が、引かかっちゃって」

「……ありがとう。
何かあったら、今度は私が聞くから」

「……ほんとにさ、優しいよね、いつも。
(反応に対して) そうだよ？
自分の恋人が完璧すぎて泣きそうだよ、私は。
泣かないけど、ふふっ」

「……外の空気吸うと落ち着くなあ
うちの中も好きだけど……。わかる？」

「そうだねえ。
そろそろ、旅行行きたい。
いききたいなあ」

「生活リズムが違うから、中々ねえ……。
一緒に暮らしているのに」

「うん。学生の時も合わせるの大変だったけどねえ。
……社会人になっても変わらずか」

「やっぱ、時間は作るものだね」

雨が少し降ってくる。

「（滴が落ちてきて）んっ。
あれ？今……」

（さらに落ちてきて）あ、あー。
降ってきたね、雨」

「ん、そうだね。戻ろっか」

二人、ベランダから部屋に戻る。

○リビング

上着を脱ぐ二人。

「貸してー？しまっておく」

私から上着を受け取る柚乃。

「冬服、意外に買っちゃたなー。
あ、これあんまり着てない」

「ん？どれって、これー。
……ねえ、見てないでしょ」

「これさあ、お出かけ用に買ったんだよね。
……そう、先月のイベントで着たつきりかなあ。
好きなんだけどねえ、出番がなあ」

柚乃、水を飲む。

「（水を飲んだあとに）ふうー。
あのさ、さっきの話。
……うん、近いうちに旅行いかない？」

柚乃、スケジュール帳を確認し始める。

「なんか、行けそうなタイミングあるかな？
スケジュールみてるけど……。
あ、来年の私の本番が終わったらとか？」

私に近づいて、スケジュール帳をみせる。

「ほら、このへん。
どう？ 一泊二日」

「あ、ほんと？
じゃあ、けてい！

……うん、ひさびさ！ 今度はどこ行こっか」

「寒いし、やっぱり温泉とか？
車出してさ」

「……露天風呂、あー、去年の夏の。
あれ以来、露天は入ってないし。
いいね」

「海！ 最高だった！
うん、景色もお酒もよかったし……」

「お風呂で飲むって中々できない経験だったね。
しばらく日本酒ハマったなあ」

この辺りで、二人でソファーに座る。

「いや、嘘じゃないって！」

一時期、二人で飲み屋発掘とかしたじゃん」

「言うほどじゃないかもしれないけど、

私の中ではハマったの」

「なにー？ やけに追求する」

「お酒、弱くないもん。

そっちの方が、すぐ顔赤くなるじゃん！」

「もうー！

おりゃー！ くすっぐてやるー！」

「ふふっ、ほら、逃げない！ 逃げないのー！

こちょこちょこちょこちょ……。

ふふふふっ、はははっ」

「(やり返されて驚いて) やっ！

あ！ たんま！ 私弱いから！ 弱いからあー！

はははっ、やめてってー！

もう無理ー！ むりいー！」

「(ふてくされて) はー、……さいあく。

あーあ、もう知らないよー、もう、知らない」

「……あーあ、柚乃は拗ねました」

私、柚乃の肩を叩いて

「なに？」

私、柚乃を抱きしめて

「……なあに？」

そんな、抱きしめるだけで機嫌なおると思う？」

私、柚乃に擦りつくように抱きしめる。

「んー、んー！ ふふふっ。

（楽しそうに）……なおった」

「……雨、弱くなったかな？

いや、コンビニ行こうかなって」

「なんかさっき日本酒の話してたら、急に飲みたくなって」

「熱燗！ やってみたい！

あれ、でも徳利がないとできない？」

私、スマホで検索する。

「調べてる？ 今。

（スマホの画面をみて）ん、電子レンジで使える容器ならできそうだね。じゃあ、買ってくる」

「……あ、一緒にくる？

そうだね、せっかくだし散歩しよっか」

「……うん、いこ」

【EP04：ナイト・クルージング 夜の散歩】

○外・コンビニ前（夜）

雨が降っている中、外に出かけた二人。
コンビニで買い物を済まして外に出る。

「（外の空気を吸って）ふうー……。
（空の様子をみて）お、まだ降ってる……。ね。
これ持ってもらっていい？」

柚乃、ビニール袋に入ったお酒を私に渡す。

「ありがとう」

○外・道

柚乃と私、相合傘で帰り道を歩く。

「さっき忘年会やろうって連絡きてたね。
サークルの同期、だいぶ会ってないねえ」

「私たちが一緒に住んでるって誰かに話した？
あー、やっぱり？
私も。言っていない」

「もし忘年会行くなら、話すことになるか。
……。ねえ、付き合ってるって、言ってもいい？」

「あ、驚いた？」

「……。うん、前から考えてて。
私たちがこのまま一緒にいればさ、
いつかは言わなきゃいけないかなって」

「いや、というか、言いたいんだよね、私が。
気の知れた仲間には」

「ここ住む時もさ、
友達同士でルームシェアしますって、
親とか不動産屋さんに話して。
仕事関係の人にも友達と暮らしてますって言って……」

「なんか、んー、そうやって嘘をつく度、
傷ついている自分がいてさ。
仕方ないことかもしれないけど……。
でも、なるべく、そういう機会はなくしたいって思った」

「あー、そうだね。
怖くないって言ったら、嘘。
でも、自分の気持ちを抑えるのに慣れちゃう方が、よっぽど怖い」

「だからさ、
少しずつでも、私たちの気持ちを大事にできる世界にしたいから、
まずはその第一歩ということで……どうかな？」

「みんな、受け入れてくれると思う。
……でしょ？
時間はかかるかも知れないけどね」

「……ありがとう。大好き」

「ね、どんな反応するかなあ。
あ、でも、あいつは、ショック受けるかなあ」

「私、知ってるよ？
ちよくちよく、連絡きてるでしょ」

「ご飯、誘われてるんでしょー？
聞いたの、風の噂で」

「あー、これでやっと言えるなー。
『私の恋人にちょっとした出さないでくれる？』って。
ふふふっ」

柚乃、雨が上がったことに気づく。

「……あれ？もしかして、止んでる？
(傘を下ろして確認して) あ、平気そう」

柚乃、傘を閉じる。

「半分持ってもいい？
えーと、じゃあ、そっち」

柚乃、私から袋を受け取る。

「この中華料理屋、気になっているんだよねえ。
前から」

「微妙に入りにくい。
うん、でも、いい匂いする。
帰り道に通るとさ」

「……あ、わかる？
一回だけ、お昼にここのお弁当買って食べたんだよ。
えっとね、たしか、ぎょうざのやつ」

「結構美味しかったよ。
ここのコース、行ってみたくない？
美味しそう」

「今週？
いや、明日！明日こよー！
思い立ったら吉日っていうではないか」

「……（木をみて）木も寒そうにしてるね。
すっかり葉が落ちて」

「引越してきた時、
この辺りの桜、うん、すごい綺麗だった」

「そう、したした！」

「冬バージョンも撮っておく？ 記念に」

柚乃、スマホで写真を撮る。

「ねえ、恥ずかしがらないでー。
ほら、もうちょっと、モデルになったつもりで……」

「いい！ いいー！」

柚乃、何枚か写真を撮る。

「ふふふっ。

……うん。次の春も撮りたい」

柚乃、私の手を取って

「手、冷た！

私より冷たくない？」

「普段は私よりあったかいのに。
では、温めて差し上げましょう」

柚乃、私の手をポケットに入れていく。

「（呟き）ふふふっ、ポケットの中で繋いでる」

「……うん、うちに帰ろうっ」

【EP05：スイート・プール風呂上りのロマンス】

○お風呂（シャワー）

シャワーを浴びている私。

先上がった柚乃が今からセリフの練習をする声が聞こえる。

（セリフの途中で）シャワーを浴び終わって、

お風呂から上がってくる。

身体をタオルで拭き、パジャマを着る。

軽く化粧水を顔につけてリビングへ。

「（独り言）……よし、だいぶ入ってきたかな」

私、冷蔵庫を開けて、パックを探す。

「え？ なに？」

ああ、パック？ 冷蔵庫に入れたけど……。わかる？ 二段目の端」

「見つかった？ よかった」

○リビング

私、パックを持って柚乃の近くにやってくる。

「今日、頼んでたやつ、早速使ったね。

……うん、数少なかったよ。人気なんだね」

「珍しい……。

パック、大体、私が買ってきたの使ってたじゃん」

パックの袋を開封する。

「ああ、動画？メイク系の？

（効能を聞いて）へえー。

えー、興味ある。

今度私も使ってみたい」

私、パックを自分の顔に貼る。

「……あ、オイル塗った？髪。

あー、忘れたな？髪、痛むよー？」

柚乃、立ち上がってオイルを取ってくる。

「え？私がつけるの？

（嬉しそうに）もー、注文が多いお客さんですこと」

柚乃、オイル（流さないトリートメント的な）を手取る。

「……はい。じゃあつけますよー」

柚乃、私の髪にオイルをつけていく。

「髪の色、いい感じ。

ちょっと抜けた？」

「働きはじめの頃、だいぶ暗めだったから。

どんな髪色でも可愛いんだけどさ」

「お世辞抜きで、今が一番可愛い。
いっつもね」

「……はい、では、可愛い子にはサービスで、
頭皮のマッサージもしてあげちゃおうねー」

「あげちゃおうねのイントネーションが変で」
ふふふっ、なんか、今、変な声出た！
ふふふっ、（もう一度再現して）あげちゃおうねー、ふふふっ、ははっ」

柚乃、私の頭をマッサージする。

「……力加減、大丈夫そう？
……ん」

「あ、だいぶ硬いですねー、これは。
（力を入れて）ほぐしてあげる」

柚乃、私の頭マッサージを強めにする。

「あ、パック、そろそろじゃない？
じゃあ、マッサージ、おしまいっ」

私、顔のパックを剥がす。

乳液を手にとって保湿する。

「（ちょっとふざけて）保湿するの偉いよー。偉い。
（ぼそっと）人生の内、
どれぐらいの時間、保湿に使ってるのかな」

「……」ヶ月くらい？ いや、もっとかな？
んー、自分の身体は世界に一つだけだもんね。
メンテナンスには、それくらいかかるか」

「あ、髪、乾かす？
ん、やってあげる」

柚乃、ドライヤーを充電口にさして乾かし始める。

「……これで乾いたかな？」

（触って確認して）うん、うん、大丈夫そう」

「（呟く）……髪、きれい」

柚乃、私を後ろから抱きしめて匂いを嗅ぐ。

「（鼻であなたの髪の毛の匂いを嗅ぐアドリブから）

んー……。んー！ふふふっ。

……なに？

（ちよっと間があって）……いや、好きだなあって」

柚乃、体勢を変えて、私の横にきてキスをする。

「（キスをして）……ちゅっ。

（少し間をあげてまたキスをして）ん……ちゅっ」

「……お風呂、入ったばかりなの？

……うん、だって、

くつついてたら、スイッチ入っちゃった」

「（本当に小さな声で）ちよっとだけ。

（キスをして）ん……ちゅっ。

（キスをして）……ちゅっ。

（キスをして）……ちゅっ」

「……ごめん、ちよっとじゃ、収まらないかも」

「……ベッド、いい」

○リビング・夜

私、ベッドの上で眠っている。

柚乃がピアノを弾いていて、その音を遠くに聴きながら目を覚ます。

「（あなたに気付き、弾くのをやめて）

……あつ、起きた？」

「（笑いながら）……そう、あの後、寝ちゃった。二人して」

私、柚乃の近くまでやってくる。

「なんか、目が覚めて……。
隣？……いいよ」

私、柚乃の隣に座る。

「……そういえば、
弾いてるところってあんまりみたことない。
昔、習ってたんだよね？」

「ちょっと、弾いてみてよ。
……うん、聞いてみたい」

私、軽く鍵盤を押して弾く。

「……いいね。
止めないで、そのまま……」

柚乃、私が弾いてるところに加わって

「ふふっ、……一緒に」

私と柚乃、少しだけ連弾する。

「（息を吐いて）はあ〜」

「息ぴったり。」

「はじめて合わせたのに」

柚乃、遊ぶように鍵盤を押す。

「……ピアノはじめたのって、いくつぐらいのとき？」

「（相槌を打って）うん。……うん。」

教室、通ってたんだ。

あ、私も。……同じくらいの時にやってた」

「もしかしたら、どこかで会ってたかもしれないね。
発表会とか」

「……それって、

出会ってない時も、人生のそばにいたってことでしょ？」

「……うん。大きくなって、出会えてよかった」

「ねえ。これからさ、たまに二人で弾こうよ。」

弾ける曲増やしてさ……」

「……小さな演奏会、できたら素敵だね」

「ふふふっ、いや、どんどん夢が増えていくなあって。
つい一年前まで一緒に暮らすことが夢だったのに」

「……ね、すごいよね。」

夢って、叶ったら終わるんじゃないくて、

その続きが、また新しい夢が、できるんだね」

「……うん、これからも。」

「一緒にみよう。夢のような夢を」

「……ねえねえ。もうちょっとだけ、弾いて」

私、ピアノを弾き始める。

柚乃、だんだん眠くなってきた、

私の方に寄りかかる。演奏を止める。

「(うとうとして) ……んー。」

……ん、ごめん、眠くなってきちゃった。

……うん、寝る」

私と柚乃、ベッドに入っていく。

「(小さく呟くように) ……おやすみ」

【EPILOGUE：ウィンター・メモリー きみと結ばれた夢】

○私と柚乃の夢

私と柚乃は、夢をみている。

二人で過ごした思い出の断片が流れてくる。

【SP：柚乃の誕生日と年越しカウントダウン】

12月31日。大晦日。

私は、柚乃の誕生日をお祝いする。

そのまま、カウントダウンをして年越しをする。

特定の時間から聞き始めると実際に年越しできるというトラックです。

○リビング

私は、ケーキに刺さった蝋燭に火を付ける。

「じゃあ、消すよ？」

（火を消すように息を吹きかける）ふーっ！

あ、まだ残ってる、ふっ！ ふーっ！」

「ありがとうー！ 祝ってもらえて嬉しい。

ケーキまで作ってもらえるなんて……ほんと幸せ」

「大晦日が誕生日って珍しいでしょ。

私、この日に生まれたから柚乃って名前になったんだよね」

「うちの家系、みんな花の名前がついてて。

12月31日の誕生花（たんじょうか）が『柚』なんだ」

「……そうだね、全部は食べ切れないから、

この正月で……うん、おせちと一緒に」

「え？ あ、もう、そんな時間？

そろそろカウントダウン始まる？」

「わっ、わー！ どうしよう！ きちゃう！ 新年！」

「今年やり残したこともうないかな……？」

「（気付いて） あっ！ ちょっと、ちょっときて！
いいから！ 早く！」

柚乃、私にキスをする。

「（キスをして） ……ちゅっ。
よしっ、年内最後のチューした！
これで心置きなく年越せる」

「あ、あ、くる、くるよ！
カウントダウン！」

「それじゃあ、『せーの』の合図で
10からいくからね？
いい？

……じゃあ、いくよ？ せーの！」

「10！ 9！ 8！ 7！ 6！
5！ 4！ 3！ 2！ 1！」

一瞬、静かになって落ちついて

「……あけまして、おめでとうございます」

「はあー……」。

一緒に年越しできたね」

「……うん。
今年も、よろしく」